

今月の主な内容

1面:次期学長は福田氏
4面:震災特集
8面:アメフト、勝ち越し



神戸大学ニュースネット

NEWS NET

©神戸大学ニュースネット委員会 http://home.kobe-u.com/top/newsnet/index.html
関西学生報道連盟共同編集室=〒532-0011大阪市淀川区西中島3-21-9-502
電話06-6307-1315 FAX06-6307-1316 メールnewsnet@kobe-u.com

しらすな会
軟式・硬式ピッチングマシン貸出無料!
体育館・野球場・テニスコート・その他手配万全!
南紀白浜サークル
合宿情報

F649-2211
和歌山県西牟婁郡白浜町2525-4
電話0120-63-1662
本紙のみの特典あり!
http://www.shirasunet.jp

1月号

学長選考会議 次期学長は福田氏

現職の野上野行学長が今年度で任期満了することに伴って次期学長選考で、学長選考会議は11月28日午前、学内掲示板と神戸大公式ホームページで次期学長予定者を発表し、福田秀樹・自然科学系先端融合研究科長が選出された。福田氏は11月26日に行われた意向投票で95票を獲得し、もう一人の候補者、高井義美・医学研究科長をリード。その後学長選考会議が開催され、福田氏が正式に次期学長予定者に選出された。

福田氏は神戸大では初の一般企業出身の学長となる。次期学長予定者決定に伴って行われた記者会見では、「経営者らしい発言が多く飛び出した。現在の大学運営は無駄が多く、学生だけでなく教授や研究



記者会見に臨む、福田秀樹・自然科学系先端融合研究科長。(11月28日・神戸大理学部で 撮影=浅井淳平)

企業出身の学長は初 大学運営の改革などを示唆

「国際的に卓越した社会貢献の推進」「卓越した大学経営基盤の確立」の4つを挙げた。具体的内容として「基礎研究を重視し、そのための環境整備に取り組むこと」が研究・教育に専念出来る環境を整っていないと指摘。自身の改革の柱として「世界最高水準の学術研究の場となること」「国際的に競争力のある教育基盤」

「国際的に卓越した社会貢献の推進」「卓越した大学経営基盤の確立」の4つを挙げた。具体的内容として「基礎研究を重視し、そのための環境整備に取り組むこと」

震災を新しい視点から 阪神・淡路大震災報道のシンポジウム

「震災・記憶・史料」阪神・淡路大震災報道の歴史を振り返るシンポジウムが12月7日、人と防災未来センターで行われた。約40人が新聞という資料についての報告会とディスカッションに参加した。シンポジウムの主催者である「歴史資料ネットワーク」は、被災資料の救出を目的に結成されたボランティア団体。このシンポジウムは、阪神・淡路大震災が起こった平成7年から年一回開催されている。

今回は歴史的資料として新聞について、研究する立場である歴史学者と、作る立場である記者の対話をコンセプトにセッションが行われた。元朝日新聞編集委員・現在関西学院・山中茂樹さん、読売新聞の堀井宏徳記者、神戸新聞の石崎勝伸記者の3人による、3つの違う立場からの阪神・淡路大震災に対する報道の現状が報告された。被害地以外の関西圏、東京、被害地という3つの立場から各記者が感じたことを述べる場面もあった。報告会の中では、震災に対する報道の仕方が関西と関東で異なることや、歴史資料について



質問に回答する石崎記者。(12月7日・人と防災未来センターで 撮影=新田理絵)

ての視点の変化などが挙げられた。関西では震災の現状を伝えようとしているのに対し、関東では「東京でこのような地震があったら」という仮定の話や防災・復興の記事がメインだった。この東西の温度差に悩む記者の声も伝えられた。

歴史学者の立場からは、同ネットワーク研究員の佐々木和子さんが参加した。佐々木さんは、資料としての新聞を「収集すべきものから、資料になる前の生の声を伝えるもの」とみなす多角的な視点へと変化していることを述べ

被災地の「今」を知る 震災救援隊による街歩き

学生震災救援隊による企画「被災地・長田のまちを歩く」大震災から14年、まじつくりの軌跡が12月7日に行われた。

この企画の目的は、阪神・淡路大震災で大きな被害を受けた神戸市長田区・兵庫区の復興の様子を、実際に歩いて、話を聞くことにより、実感すること。10人程度の参加者は、講師として招かれたアマチュアカメラマンの和田幹司さんの話を聞きながら、JR兵庫駅からJR鷹取駅付近の教会まで3時間半かけて歩いた。開発が進みマンションや店舗が並ぶ「アスター」地区や、昔ながらの木造家屋が見られる真野地区など、さまざまな街の風景が混在する長田の様子に、参加者からは感嘆の声があがった。また、和田さんが震災当時撮影した写真も、震災や現在の長田に対する参加者の理解を深めた。

街歩きは今回で2回目。

とや、執行部をスリム化して効率性を上げるとともに各部署が今以上に自主性を打ち出せるようにすることなどを述べた。「研究だけ、教育だけでなく、大学経営もしっかりやっていないといけない。私のマネジメント能力が活かせると思える」と話し、経営面も積極的に着手していく考えを明らかにした。

また、平成22年度にポータルサイト構築に着手される次世代のスポーツコンピュータを活用した人材育成を図る場として、「システム情報学研究科(仮称)」を設立する構想も発表。ただし、現在は具体的な内容を話し出すのは出来ないという。

福田氏が正式に学長の職に就くのは来年の4月1日から。任期は4年。

【浅井淳平】



大トリを飾った、みなと家ああさん。(11月29日・兵庫県民小劇場で 撮影=有田朋史)

響き渡る笑い声 落研、第43回六甲寄席

神戸大落語研究会による「第43回六甲寄席」が11月20日、兵庫県民小劇場で行われた。3時間半に及ぶ長丁場にもかかわらず、会場からの拍手と笑い声が止むことがなかった。

神戸大落語研究会による「第43回六甲寄席」が11月20日、兵庫県民小劇場で行われた。3時間半に及ぶ長丁場にもかかわらず、会場からの拍手と笑い声が止むことがなかった。

子供達に「希望」を 清原和博さん、神戸大病院を訪問

元プロ野球オリックス・バファローズの清原和博さんが11月25日、神戸大医学部附属病院の子供センターを訪れた。

清原さんは昨年7月、神戸大病院で膝の手術を受けた。今回の訪問は、病院への恩返しとして、入院している子供や患者の力になりたい、という清原さんの希望で実現した。

終始穏やかな表情で子供たちと触れ合った清原さん。引退試合で着用していたユニフォームは、病院に寄贈するという。

今後については明意を避けたが、最後に「厳しい戦いだった。【浅井淳平】

子供と記念写真を撮る清原さん。(11月25日・神戸大医学部附属病院で 撮影=濱田直毅)

生き方を考える演劇 はちの巣座、卒業公演

神戸大演劇研究会はちの巣座の第24期卒業公演「キレイー 神様と待ち合わせした女」が、12月7日に行われた六甲台講堂の公演で千秋楽を迎えた。今回で最後の出演となる4年生8人を含む、総勢22人で演じた約3時間の舞台が終わり、満席の会場は拍手に包まれた。

「お客さんがいっぱい来て、笑顔で帰ってくれるのが楽しかった。全公演を終え、演出を担当した三沢巨さん(経営・4年)は満足そうな表情で公演を振り返った。物語は、人間の生き方がテーマになっており、演出の力で「主役の生き方。色々なことに逃げないで向き合っていくか」「キレイー」を伝えたいという三沢さん。

卒業後、演劇は「いいお客さん」として関わり、「役者」何らかの評価を貰え、演劇を続けたい人が続けられるようにしていきたいと話した。【有田朋史】

企画の中心となった救援隊の西山奈央子さん(経済・2年)は「今回は鷹取まで行っただけで、震災で変わった所も変わらなかった所もあり、自分たちが知らない神戸が見れて良かった。街歩きをきっかけにして『もっと(神戸の街を)知りたい』につながってほしい」と話した。

【浅井淳平】

就活に...この新聞。

先が読めない時代だからこそ、読む。

朝日新聞
日本経済新聞

E-mailでのお申し込みはこのQRコードで!

info@asa-takaha.com

試読・購読のお申し込みは
ASA 高羽

0120-084013
神戸市灘区土山町1-13
※但し、灘区在住の方に限り
http://www.asa-takaha.com

退。すべての演が終わると、見送りに出た会員たちが、退場する観客を取り囲んだ。「3年間やってきて良かったことは、お客さんと触れ合えたこと。【浅井淳平】

拍手に包まれた。「お客さんがいっぱい来て、笑顔で帰ってくれるのが楽しかった。全公演を終え、演出を担当した三沢巨さん(経営・4年)は満足そうな表情で公演を振り返った。物語は、人間の生き方がテーマになっており、演出の力で「主役の生き方。色々なことに逃げないで向き合っていくか」「キレイー」を伝えたいという三沢さん。

卒業後、演劇は「いいお客さん」として関わり、「役者」何らかの評価を貰え、演劇を続けたい人が続けられるようにしていきたいと話した。【有田朋史】

伏流水

平成21年5月21日、司法制度の大改革ともいえる裁判員制度がスタートする。

裁判員制度では、裁判員は選挙人名簿から無作為抽出される。つまり、新たな制度においては私たち大学生も裁判員になり得るのである。▽裁判員と聞いてまず何を思い浮かべるだろうか。「難しい」「不安」などマイナスの面が多いだろうか。あるいは興味がある、「挑戦してみたい」などプラスの面が多いだろうか。▽私たち大学生は裁判員に選ばれても辞退することが出来る。想像してみよう。自分ももし選ばれたらどうしようかな行動をとるだろうか。私の周囲の友人たちに意見を聞いてみると、それらは人それぞれ大きく異なるものであった。ある人は「社会人になって時間に余裕がなくなる前に学生のうちに体験できるものならしてみたい」、またある人は「大学の授業を犠牲にしてまで参加したくない」と。▽参加するか辞退するか。いざいざにしろ新たな制度導入前に重要なことは、自分自身も裁判員に選ばれたらどうしようかという一度考えてみることはないだろうか。【田丸梨梨】

阪神淡路大震災・特集 14年目



震災当時、神戸大の留学生が写真を集めて作った切り絵。(提供：神戸大留学生センター)

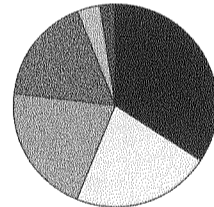
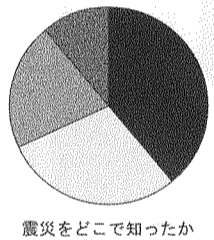
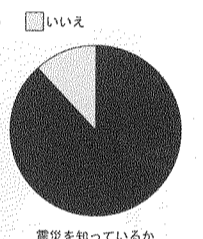
留学生と震災

神戸大・関学・神女院大

6437人の命を奪った阪神淡路大震災から、まもなく14年が経つ。大学生・短大生は31大学111人が犠牲になった(日文科省発表)。中には祖国から遠く離れた日本の地で無念の死を遂げた留学生たちもいる。UNN関西学生報道連盟に所属する加盟大でも、神戸大で7人の留学生が亡くなった。今年の5月12日には中国で6万人以上の犠牲者がでた四川大地震が発生。世界のどこにいても、いつ大地震がやって来かわからない。震災で被害の大きかった神戸大、関学、神女院大の留学生は地震に対してどのような意識を持っているのか。震災当時、留学生はどのような様子だったのか。大学は留学生に対して、どのように震災を教えているのか。3つの事柄に焦点を当てた。(震災取材班)

防災教育の徹底を 2割の留学生、避難わからず

UNN関西学生報道連盟 調査によると、イギリスは12月3日から22日の期間で神戸大、関学、神女院大に通う14カ国76人の留学生を対象に地震に関する意識調査を行った。震災を知っているかという問いに、留学生が92.1%と答えた一方で、大地震が起きたらどこに避難すればいいかわからないという回答が18.4%あった。震災について知っているのは、一番多かったのが祖国の37.8%、大学の授業や友人は最も少なく10.8%だった。



「トイレはむしろ危険であり、地下室は身近にあるとは言えない。震災当時、どこに避難していいかわからず、誤った情報を信じて混乱した留学生も多かったという。3大学ともに入学時のオリエンテーションで配布する学生生活に関するハンドブックに、震災以降、地震が起きたときに学生はどのように対応したらよいか明記されるようになったが、詳しく説明する時間が十分ではないのが現状だ。神戸大は学生寮で火災の避難訓練を行っているが、神戸大の4年生でアメリカのシリアル出身のエヴァリンギさんは「寮で避難方法がわかるが、その他の場所での地震の対処方はわからない」と話す。中園出身の関学9年生も「大学で震災について教えるものがない。韓国出身で神女院大1年生の姜美善さんは「学校で習ったのは神戸に大きな地震があったという事実だけ。地震が起きたら机の下に入る」としか知らない。」

結果を受け、震災当時から神戸大の留学生センターに務め、被災した留学生の手配を監督した瀬口郁子教授は「母国で防災教育、特に地震に備えるの教育を受けている学生がほとんどいない」と話す。大学には「減災につながる防災教育についても学内外の機関、地域住民とも連携した形で留学生等対象の防災セミナーをしていく必要がある」と提案。「留学生自身も地域住民であるという意識を持ち、近隣住民とコミュニケーションをとり、安心して暮らせる街づくりに積極的に参加していかなくては、地震だけでなく、防災・防犯全般にも役立つと思う」と指摘した。

震災当時の留学生 神戸大

震災当時、神戸大には523人の留学生が在籍。うち7人が犠牲となった。母国語も通じない異国の地でどのように震災を体験したのだろうか。

当時、神戸大に留学し、北区に住んでいた朴鍾祐准教授は振り返る。「最初、トラックが市営住宅に突っ込んで来たかと思った。揺れが収まってラジオを聞いて地震だとわかった。」

当時、留学生に犠牲者が亡くなった原因は、ほとんどが被害の少なかった大阪府で下宿していたからだという。それでも、安否確認には約1ヶ月かかった。

現在、国際協力研究科長は当時、留学生担当を務めていた春木神輔さんは「職員2人と震災発生の日後から安否確認に奔走した。日本人の方から連絡して下さる人もいたが、どこにも行ったのかわからない人もいた。留学生間のつながりを利用して、全員が無事を確認したという。」

関学

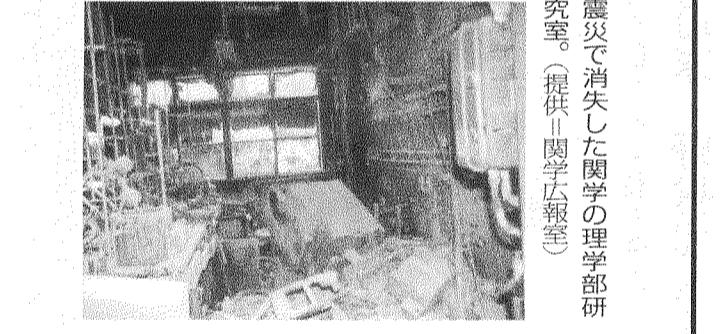
震災で関学は学生15人が亡くなったが、留学生は204人全員が無事だった。学舎は理学部で火災が発生。神女院大では当時留学生は在学していなかった。また、震災で死傷した学生や教職員は幸いいなかった。しかし、ヴォリス建築で知られる貴重な建物のほとんどが全壊または半壊となり、その多くが撤去された。

神女院大

神女院大では当時留学生は在学していなかった。また、震災で死傷した学生や教職員は幸いいなかった。しかし、ヴォリス建築で知られる貴重な建物のほとんどが全壊または半壊となり、その多くが撤去された。



震災当時、亡くなった友達の冥福を祈る神戸大の留学生。(提供：神戸大留学生センター)



震災で消失した関学の理学部研究室。(提供：関学広報室)



震災で神女院大の学生寮は全壊し、撤去された。(提供：神女院大施設課)

神戸大留学生センター 留学生対象に授業

神戸大、関学、神女院大のうち、神戸大だけが、留学生センターで留学生向けに震災について触れる授業を開講している。

クラスの大半の学生が地震を体験したことがないため、地震がどういったものかという説明をし、イメージを持ってもらう。「日本事情」という授業などで、寛平雅夫准教授は、地震のメカニズムを説明するビデオを流したり、対処法の説明を行ったりしている。

「今、地震が起こったらどうすればいいのかわかるのか。留学生の学舎状態はいいのかわかるのか」と瀬口郁子教授は話す。

震災時の資料を読み返す神戸大留学生センターの瀬口郁子教授

神戸大、関学、神女院大のうち、瀬口郁子教授は、震災直後、『忘れられない』あの日神戸からの声』という当時被災した留学生の手記を監修した。「心のケア」の目的で、震災を経験した7人の留学生が中心となって制作を行った。インパクトを持ってもらえるように、多言語で編集されている。これらの手記をボランティア団体「震災を語りつなぐ会KOBEL」に朗読してもらう。他にも、神戸大、神戸市教委、読売テレビ、読売新聞が共同制作した震災教育教材「デジタル版幸甚連ぼう」を視聴するなど、視覚や聴覚に訴えかける授業を行っている。

留学生が地域の人に助けられることもあるし、逆に、地域の人を助けることもある。共に生きることで、減災につながる」と瀬口教授は話す。

アメフット 15年ぶり勝ち越し

関学に次ぐ3位

3連敗から巻き返す

関西学生アメリカンフットボールリーグ最終節、神戸大1近大が1月29日にエキスポフラッシュフィールドで行われた。前半、神戸大が見事な攻めで近大を倒し、4つのTDを奪う。終盤は近大ペースになりかけたがそのまま逃げ切り、35-7で勝利した。これで通算成績4勝3敗とし15年ぶりの勝ち越しを決め、有終の美を飾った。



第1Q、先制となる2ヤードTDランを決めるRB小椋。(11月29日・エキスポフラッシュフィールドで 撮影=濱田直毅)

レイバンズ激闘の記録

9/6	○	24	-	10	関大
9/23	●	3	-	23	京大
10/5	●	7	-	27	立命
10/19	●	7	-	44	関大
11/1	○	24	-	13	同志
11/15	○	17	-	3	甲南
11/29	○	35	-	7	近大

4勝3敗 3位

前半、神戸大オフェンス陣が暴れまくった。「今まで一番いい攻めだった」と振り返る攻撃の要QB大原(経済・4年)。最初のドライブでWR大園(発達・3年)、WR桂(発達・4年)、TE東内(工・3年)らで多彩にパスを回すと第1Q8分、最後はRB小椋(海軍・3年)の2ヤードのランTDで先制。その後はパス、ランを組み合わせた攻めで前半だけで4つのTDを奪った。後半は、「今年は周りがOLが弱いと言われていたが今日は良かった」と小椋が話すように、OLが相手DLを寄せつけなかった。

首位チーム撃破

関西フットサルリーグ第10節、神戸大フオルサ・ヒュンフライン(以下ヒュンフ)が12月13日、神戸グリーンアリーナで行われた。フオルサは、3-2と勝利し、勝ち点14の4位。フオルサは残留をほぼ確定なものにした。(12月15日現在)



首位ヒュンフ撃破、残留をほぼ確定させる勝利に湧くフオルサのコーチ陣。(12月13日・神戸グリーンアリーナで 撮影=田辺翔吾)

フットサル 降格圏抜け出す

関西リーグ順位表(12月15日現在)

1位	ヒュンフライン	勝ち点	21
2位	近鉄	勝ち点	15
3位	J O Y	勝ち点	15
4位	神戸大フオルサ	勝ち点	14

11位	高槻松原	勝ち点	10
12位	AFC神戸	勝ち点	8
※11位以下は府県リーグに自動降格			

フットサル部が企画した「フオルサ応援ツアー」で駆けつけた応援団や神戸大生の大きな声援の中行われた、首位ヒュンフとの大一番。残留を決めるためにも負けられない試合で、学生王者フオルサが躍動した。「前から練習していた形だった(A森川、工・4年)。後半19分、森川がG小川(工・3年)からのボールを頭で合わせ、ゴール。残り38秒での勝ち越しだった。

フオルサは先制ゴールを決め、1-0で前半を折り返す。2-1とリードで迎えた後半19分、失点を許し同点。だが、その9秒後に森川のゴールが生まれ、土壇場でフオルサが勝ち越しに成功した。「勝負強さ、それがフオルサの強み」。A東中主将(発達・3年)も満足げな表情を浮かべた。

試合序盤から、前線のプレスと我慢の守備で自分たちのリズムを作っていたフオルサが大きな勝ち点3を手にした。他会場の結果から、関西リーグの残留決定は最終節へと持ち越しとなったものの、得失点差で優位に立つフオルサの残留はほぼ確定。降格争いからの脱出に成功した。

アイホ 入替戦進出ならず

神戸大アイスホッケー部は11月28日に行われた関西アイスホッケー部リーグプレーオフ甲南大・近大に近大勝利の場合勝ち点差で1部、2部入れ替わり戦進出を決めることができたが、甲南大が勝利したため入れ替わり戦進出を逃した。神戸大のプレーオフでの戦

プレーオフ第2戦で敗れ落ち込む選手ら。(11月22日・関大アイスアリーナで 撮影=西田健悟)

「目標として関西制覇は掲げていたけど、現実的には残留争いだった。A田中陽主将(経済・4年)は振り返る。豊富とは言葉に言い切れない。降格とのプレッシャーと戦ってきた。来年は1部のシーズンになる。「自分たちを信じれば絶対1部になれる」。主将はその後輩にエールを送り、ユニフォームを脱いだ。【西田健悟】

ベスト11&優秀選手



レイバンズのWR大園樹(発達・3年)が関西学生アメフットリーグのベスト11と優秀攻撃選手に選ばれた。3年連続パス最多捕球をマークした。今季の全7試合に出場し、捕球回数51回、総獲得ヤード数529、TD6回(パスの成績)。「今季は100パーセントの力を出せる試合が多かった。記録も1年生の時に比べると約200ヤード少ない。ロングゲインができてなかったことが悔しい」と表情を曇らせた。自分の活躍でチームの勝利に貢献したい、という意識が人一倍強い。だから今季の記録は満足いくものではない。常に高みを目指し妥協を許さない、彼は今日も進化し続ける。【西田健悟】

関西学生男子ラクロスリーグ最終節、神戸大・京産大が11月3日、大阪長居球技場で行われた。先制は1勝1敗1分3位。チームは昨季1部リーグから転落。1部復帰を掲げ、特に連携向上に励んだ。当初は「前(昨季)のチームの方がいいと本気で思っていた」と佐竹主将は打ち明ける。転機はプレーオフでの甲南大戦。敗戦だった。連携プレーが目立つようになったという。「チーム一丸となって戦えるようになった」。開幕時とは異なる「ルースターズ」(神戸大アイスホッケー部の愛称)がそこにはあった。リーグ戦(プレーオフ含む)を終え、「決して満足はしていません」と佐竹主将。その言葉の理由は目標を達成していないからだ。「ただ、いいチームを作れた(佐竹主将)」。【西田健悟】

タッチフット 悔しさ残る4位

女子タッチフットボール第17回東西大学座決定戦の3位決定戦、神戸大・成城大が11月23日、王子スタジアムで行われた。1回戦の日大戦に敗れて3位決定戦に臨んだ神戸大。試合開始直後、成城大にTDラ

許す展開となった。リードされて臨んだ後半も追加点を奪われる。しかし、粘りを見せる神戸大は第4Q終盤にQB佐野(発達・3年)からWR野村(発達・2年)へのTDパスが決まり1TD差に迫る。残り

この大会で関西勢が4位に終わるのは初めて。佐野は「この感覚、光景を忘れずに投げたい。来年またこの大会で、納得できるような結果を出したい」と来年へのリベンジを誓った。【松本尚也】

東西王座決定戦



第1ダウン獲得できずに、ぼう然とするQB佐野。(11月23日・王子スタジアムで 撮影=濱田直毅)

り1分、攻撃権を得た神戸大は、パスや相手のファウルで徐々に前進。逆転を狙い何度もロングパスを試みるが、あと少しのところまでつながらなかった。そして、攻撃権を失うと無情にも時計は進み試合終了。14-20で成城大に敗れた。4年生にとって最後のとなったこの試合。C磯谷(発達・4年)は「自分たちのやりたかったことを結果として出せなかった」と悔しきれない様子だった。

男子ラクロス 2部自動降格

された神戸大は3-8で敗れリーグ最下位が確定。4年ぶり2度目の2部降格が決まった。自動降格を回避するには勝つしかない神戸大。瀬戸際に立たされた名門の最期は、呆気ないものだった。先制されると、第1Q終わって0-3。第2Qこそ粘りを見せたが、後半は運動量が低下。試合の流れに一度も乗れぬまま、試合終了と2部行きを告げるホイッスルが響いた。